

けんぼんちやくしよくかんきょうせつぼうず
絹本著色観経説法図（鎌倉時代）

〔所有者〕宗教法人 長宝寺
〔所在地〕平野区平野本町3丁目
〔分野〕有形文化財
〔部門／種別〕美術工芸品／絵画
〔法量〕縦137.3cm×横60.4cm

長宝寺に伝来する仏画の1つである。釈迦と二ししょうもん声聞を中央に、釈迦の足いだいけぶにん元には韋提希夫人と童子形の従者を描く。釈迦の頭上には阿弥陀浄土をあらかんむりようじゆきようわしている。観無量寿経の序に描かれる、釈迦が韋提希夫人に説法する場面を絵画化した画像で、全国的にも類例をみない。制作年代は鎌倉時代末にさかのぼると考えられる、市内に残る非常に古い年代の仏画である。



しほんぼくしよくくじみょうごう てんぶん ねんれんじゆんうらがき
紙本墨書六字名号 天文13年蓮淳裏書（室町時代）

〔所有者〕宗教法人 雲荃寺
〔所在地〕東住吉区鷹合4丁目
〔分野〕有形文化財
〔部門〕歴史資料
〔法量〕縦90.3cm×横32.3cm

本願寺8世門主蓮如は門徒を教化するにあたって、草書体であらわした六字名号を本尊として下付した。雲荃寺本は、蓮如真筆を証する裏書を同伴している。この裏書は蓮如没後の約50年後の天文13年（1544）に蓮如の第11子である蓮淳が記したもので、名号本尊が中世の段階で蓮如筆と考えられていたことを示している。本願寺坊官が慶長9年（1604）に下付の際に記した箱書のある木箱も伝来している。蓮如筆とされる草書体の六字名号は多く残るが、裏書を伴う史料は全国的に希少であり、中世の本願寺教団の教化の浸透を考えるにあたり重要な史料である。



けんぼんちやくしよくりようかいまんだらす
絹本著色両界曼荼羅図（江戸時代）

〔所有者〕宗教法人 長宝寺
〔所在地〕平野区平野本町3丁目
〔分野〕有形文化財
〔部門／種別〕美術工芸品／絵画
〔法量〕縦175.1cm×横149.9cm

長宝寺に伝来する仏画の1つである。大阪市内に残る両界曼荼羅としては大幅で、慶安4年（1651）の裏書を同伴する。その記載から、同年に造立されたと考えられる。表具は造立当初のものを残し、記銘から絵師と表具師も特定できる。杭全神社の神宮寺にあった、弘法大師の御影堂の旧蔵品である。



しほんぼくしよくくじみょうごう てんしやう ねんけんじやうらがき
紙本墨書六字名号 天正13年顕如裏書（室町～江戸時代）

〔所有者〕宗教法人 明福寺
〔所在地〕北区同心1丁目
〔分野〕有形文化財
〔部門〕歴史資料
〔法量〕縦83.9cm×横29.7cm

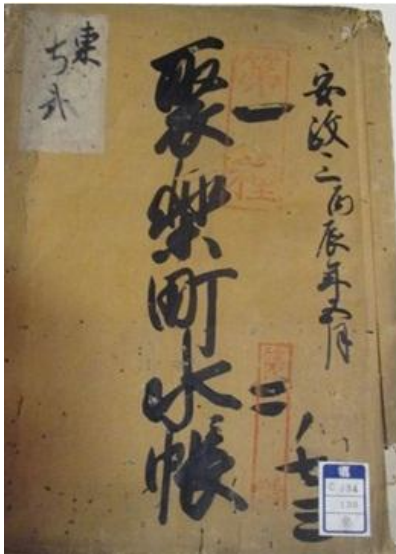
明福寺に伝来する草書体の六字名号も、裏書を伴う本尊である。本願寺11世門主顕如が、天正13年（1585）に蓮如真筆であることを証した内容である。蓮如没後約100年後の裏書だが、中世の段階でこの名号本尊が蓮如筆と考えられていたことを示している。裏書を伴う史料は全国的に希少であり、雲荃寺本とともに、中世の本願寺教団の教化の浸透を考えるにあたり重要な史料である。



おおさかしりつちゅうおうとしょかんしよぞう みずちようぐん
大阪市立中央図書館所蔵の水帳群（江戸時代）

- 〔所有者〕 大阪市（教育委員会事務局）
〔所在地〕 西区北堀江4丁目（大阪市立中央図書館）
〔分野〕 有形文化財
〔部門〕 歴史資料
〔数量〕 184点（一括）

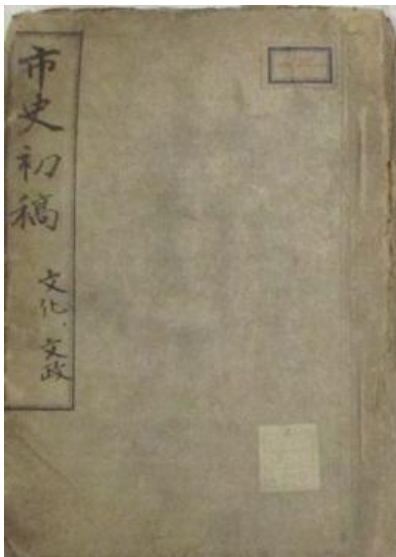
水帳は江戸時代の土地台帳で、屋敷地の間口等と所有者を記し、地子課税の基準となった。徳川幕府が土地支配を行う上で重要な役割を果たした記録であり、明暦元年（1655）から安政3年（1856）まで、定期的に改められた。中央図書館には、大坂市中の北組・南組の水帳が多数所蔵されている。伝来の経路は様々であるが、江戸時代の大坂を考えるうえでは欠くことのできない貴重な歴史資料である。



おおさかしし かんけい こうほんぐん
『大阪市史』関係の稿本群（明治時代以降）

- 〔所有者〕 大阪市（教育委員会事務局）
〔所在地〕 西区北堀江4丁目
（大阪市史編纂所、大阪市立中央図書館）
〔分野〕 有形文化財
〔部門〕 歴史資料
〔数量〕 217点（一括）

大阪市史は5回にわたって編纂されているが、このうち最初の『大阪市史』は、日本ではじめての市史として、明治32年（1901）に編纂事業が決定された。当時新進気鋭の歴史学者であった幸田成友（1873～1954）が主任となり編纂し、明治44年（1911）から大正4年（1915）にかけて8巻が刊行された。原本となる印刷用の稿本と推敲の過程を示す初校、関連して編纂された史料の稿本は、大阪市の近代史を考えるうえで重要な歴史資料である。



しょうわろくねんおおさかじょうてんしゆかくふつこう かか せつけいげんずとうかんけいしりょう
昭和六年大阪城天守閣復興に係わる設計原図等関係資料（昭和時代）

- 〔所有者〕 大阪市（経済戦略局）
〔所在地〕 中央区大阪城（大阪城天守閣）
〔分野〕 有形文化財
〔部門〕 歴史資料
〔数量〕 147点（一括）

大阪城天守閣の復興は本丸一体の公園化計画の一環として計画され、昭和6年（1931）に竣工した。設計は大阪市土木局建築課がおこない、歴史的建築に造詣が深い古川重春が囑託職員として採用された。当時城郭建築の研究は進んでおらず、また豊臣氏大坂城天守に関する資料はほとんどなかった。古川は全国の桃山時代建築や城郭建築を調査、研究し、「大坂夏の陣図屏風」に描かれた天守をもとに全体の構成から細部意匠にいたるまで、中心となって設計をおこなった。古川の実家（愛媛県）に古川が作成した設計原図、青写真・青焼陽画、細部のデッサン・スケッチ、設計書・明細書などが伝わっていて、大阪市に寄贈された。原図は製図用のガラスロで丹念に描かれたもので貴重である。青写真図面には赤線が入っていて修正されたものなどがあり、制作過程を伺うことができる。大阪のシンボルとして、また戦後各地でおこなわれた天守復興の先駆的な例としても意義のある大阪城天守閣復興の記録として、貴重である。



とよみしおおさかじょうほんまるあとしゆつどしりょう
豊臣氏大坂城本丸跡出土資料（室町～江戸時代）

- 〔所有者〕 大阪市（教育委員会事務局）
〔出土地〕 中央区大阪城
〔分野〕 有形文化財
〔部門〕 考古資料
〔数量〕 89点（一括）

大阪城天守閣の南東側で昭和59年（1984）に実施された発掘調査では、豊臣氏大坂城の本丸詰ノ丸の石垣が確認された。徳川氏大坂城の本丸地域で実施された唯一の発掘調査であり、その際の出土遺物である瓦・陶磁器・土師器等は、豊臣氏大坂城に伴うことが確実な考古資料として、発掘調査の基準となる高い価値を有する。

（画像は大坂夏の陣で被災した中国産磁器）

